

特別な教育課程の効果と振り返りについて

- 防災教育の継続的な成果としては、学年が上がるにつれて、防災意識と主体的な行動力（危険予測、状況判断、協力姿勢）が着実に向上していることが挙げられます。
- 小学校段階では、協調性や他者と協力して学ぶ姿勢が非常に高く、学年が上がるにつれてコミュニケーション能力や自己調整能力も伸びています。
- プログラミング教育により、コンピュータが社会で果たす役割への理解は広く浸透しています。

【学年別】詳細分析

小学校低学年

- 人間関係: 「協力する」意識について、学校間で肯定的な意見に差が見られます。協力する楽しさや方法を体験する機会の充実が期待されます。
- 防災教育: 規範意識が高く、地域の安全に関心を持っています。特に周辺部の学校で意識が高いことから、地域の特性に応じた教育が効果を上げていると考えられます。

小学校中学年

- 人間関係: 「教え合い、助け合い」が非常に高いレベルで定着しており、児童の社会性が順調に育まれている様子がうかがえます。
- 防災教育: 指示に従って行動する力は伸びていますが、地域の自然や防災関係者への理解が低いという課題が明確です。地域学習（フィールドワークやゲストティーチャーの招聘など）の強化が有効と考えられます。
- プログラミング: コンピュータの有用性について、特定の学校で高い認知が見られます。これは、学校ごとの取り組みが児童の理解度に影響していることを示唆しており、好事例の共有が有効です。

小学校高学年

- 人間関係: 感情のコントロールや、相手に配慮したコミュニケーション能力が大きく向上しており、内面的な成長が著しい時期であることがわかります。
- 防災教育: 主体的な判断力や協力する姿勢が前年度から大幅に向上しており、教育の成果が明確に表れています。しかし、通報や応急処置の方法を知らない児童が多いことは、命を守る上で喫緊の課題です。
- プログラミング: 学習内容を次に活かそうとする、応用的・発展的な学習態度が育っています。

中学生

人間関係: コミュニケーション方法の知識は多くの生徒が持っている一方、それを「知っている」と強く肯定する生徒や、感情をコントロールしようと「している」生徒の割合は以前より減少しています。思春期特有の難しさや、知識を実践する場面での自信の揺らぎが背景にある可能性が考えられます。

防災教育: 自分の判断で身を守ろうとする意識は非常に高く、小学校からの学びが定着していることがわかります。

プログラミング類: コンピュータで課題解決ができるという知識は高いものの、自ら課題を見つけて解決策を構想する生徒は半数程度となっています。知識・スキルを「どう使うか」という探究的な学びへの移行が次のステップとなります。